

う  
る  
春

山  
の  
人

Ich weiss nicht recht, warum ich aufstehe,  
warum ich schlafen gehe. Der Sauerreis,  
der mein Leben in Bewegung setzte, fehlt;  
der Reiz, der mich in tiefen Nächten  
munter erhielt, ist hin, der mich des  
Morgens aus dem Schlafe weckte, ist weg.——

Goethe.

小蝶ひらひら、高く低くひつれ合ふ花園の、咲き亂れたる千草のうてなを渡り、紅の窓かけをうよ  
／＼と揺るがせつゝ、音をも立てず吹き入るる春風は、あた、かき窓べちかく、長椅子引よせてう  
まゐせる、年若きゲーテの顔をなめつ。

現にもどめがたき、樂しき戀の昔を追うて、暫しの夢に、たのが心を任すにやあらん。やつれし面  
わによろこびの色見ね、口のあたりに淋しきるみさへも浮べつ。久しく櫛けづらざる髪のみだれ、  
豊かなりし名残をもとめざる頬のやせは、たゞるを打見たるのみにて、心の奥ふかく刻まれたる、  
なやみは知らるゝ。

外には花、春の光、長閑なる此頃を一室にのみたれ籠めて、静かにありし日のかたみをよび起し、  
あらむ限りの悲みを傾け、夢心地にうつし世の昔を忍ぶ、ゲーテの心ぞあはれ深けれ。

春の日もやう／＼くれ方の、日影はまど越に、弱き黄金の征矢をさし入れつ。吹きいる風も、うす寒く覺ゆめぬ。半面に冷けき光を浴びたる、ゲーテの顔には、はやほ、そみのかげだに見ゆず、もとの淋しきにかへれるが、さし伸べたる手もて、胸のあたりかきむしるさまし、著るしく眉をひろめ、聲をいださんどてや、口のあたり動かしけるが、閉されたる眼は懶げにひらかれぬ。苦しき夢にやうなされし。

ゲーテはあたりを見まわし、夕風の寒さをかちちつと、つと立上りて窓をさし、又椅子につきぬ。まだ醒めざるごとく、首うなだれぬたりしが、思ひ出したるやう、見やれる壁にかゝれるは、一幅の畫すがた、日はかくろひたれど、また明らかにそれと見らるゝは、天雲にのりてや舞ひ下りたりけむ乙女の、たゞ何となう氣高きが、くれおそき春の、一きはわかき夕の光に照榮わつ。

その輝ける黒き瞳は、いかに優しく、さがしきかを忍ばしめ、うすくれなゐの頬は、いかばかり温き情をつ、めるやを思はしめ、紅を含める唇の、綻びなばいかにさわやかなる、清き聲をや漏さんど、た、見る人をして恍惚たらしむるのみ。ゲーテは、今更のごとく眺め入りたるが、やをら身を起して像の下にいたりぬ。

おゝ、シヤロットよ。わが弱き心を慰めしは、御身のすがた。うれしみて繰返せしは、御身のやさしき言の葉。咲を亂れたるがなかにて、わが心の壁に彫られたるは、たゞ一枝の幽花、そは御身なりしよ。清き君。なつかしの君。かゝる寂しさの折々は、思はまづ御身の上にはせたりしに。されど今、われににがき御身は、徒らに人の愛とはなりぬ。我はげに如何なる思ひ、如何なる日のつもりて、かくは常闇のうちに落されし。我は愁の谷を下りゆくに、静かある彼方の空をうかゞへば、

双妻相退ふて輕風にならびゆく御身等あるを、いかで見るに似堪ぬん。されどわれは怨まじ、呪はじ。いつまでも、いつまでもせの君と、おもしろき生涯をおくり給へ。さはいへせめて雨はそき朝、雲あかき夕は、こゝに御身をこひなく、一人のあはれなるものありと、思ひ給ひてよ。されど口惜しきは、御身等の華燭の典に、つらなることかなはざりしことなり。オステルンの祭ならめと、心あてに待ちつるもかひなや、すでにバルムゾンタハに、擧げ給はんとは。なほ我に秘めたまひし。我は尊き墓をつくり、つをなき御身の像を取おろして、埋めばやと思へど、今のわれにも、なほ戀しきは御身。死するまで像はるのまゝに、あさな夕な、清らなる姿に口づけせん。

麗かなる春の光は、こゝにも訪れて、窓を開け！心を開け！あた、かき光を浴びよ！とす、むれど、闇路をたどる慰藉なき身に、なほさることのかなふべき。つれなき君よ。せめては御身の像を、か、げたくことを許してよ。我は御身の胸にひろみ入りて、第二の位置をしめなん。されどもし御身より、またく忘らるゝこといもあらば——

かゝる思の裡に、げに地獄は存するものぞ。  
あ、さるにしても日頃のわが身ころ、可笑しきものはあらじ。人はこの亂心の渦中に漂へる、われを見て將た何とかいはん。夕には、日の出をながめてうさを晴さばやと、思ひねにいぬれど、日高くなるまでは起きず。晝は、月下に悲情を高唱せんと、欲すれども、ほの暗き室に潜みていせず。われは何が爲に起き、何が爲に眠につくやを知らざるなり。あ、亂れたる我の今よ。

深く思に沈みたるゲーテは、闇の色あたりをこめて、シャロットの像もねぼろくとなりゆくに心づき、懶げに歩をめぐらして、再び椅子によりぬ。亂れがちなる彼が心を慰むるは、たゞこの闇あ

るのみ。燈火をもつけで腕拱ねけるまま、しばし彼は眼をどちつ。

どもし火はなやかに照し、うれしき衣の香、みちわたりたる舞踏會、曉々たるピアノの響につれ、シャロツテと手を組合せ、舞踏せし夕よ。穩かなりし胸は、あやし大浪の上するがごとく轟き、顔は紅を潮して、しらべに合する足の運びさへ、そゞる亂れがちなりし。

會はてて、路を例の並木路にとりてのかへるさ、燃ゆる心は夜風の冷けきさにさめて、我はひとり靜かに、戀の行末をはほるみたりしか。

ある夜のことなりき。シャロツテは翼クラフキール琴をとり出して、弾じきかせぬ。多様な律曲。あでにらうたき姿。ろの奏てたる天來の曲は、いたくわれを撲ちて、涙に溢れしめよ。わが膝によりて人形を弄びわたる、無心なるろが少女は、怪しげに我を見まもりたりき。我は胸打ふさがり、室の裡を行きつ戻りつせしに樂の手をとめて、氣を鎮めたまへよといたはりしは、シャロツテの優しきこゑ。うれしき言葉はなほ耳に残れど、今はつらき心なるを。

げに、愛なき世界は我にとりて、何するものぞ。ともさざる幻燈は、ろも何の用をかなす。愛の光はさし入れられ、くさぐさのたのしき像は、白壁の上に染め出されつるに。つれなき彼はふとろをふき消して、もとの闇となしにき。愛の光を失へる我は、譬へば一滴の水だになき、荒野の末をさまよへる旅人なれや。ろこにかけといふべきは、いと、細りしわれのすがたのみ。泉といふべきは、わが渾身にもわたざる、わかき血あるのみ。

世にかなしきは、つらき日に樂しき昔を想ふに、ましたるとはなきに、ゲーテは椅子にかかれるまま、闇のうちに坐せり。どもしびあらば、頬を傳ふて落つる涙の、一きは黒くろめなせる、衣のあ

やも見ぬわかちつらんに。

室のうち俄に明くなりしに驚き、外をながむれば、また上弦の月空にかゝり、地は花影を曳きてたばろく、露はあたりをたち單めて、たゞ夢のごとく淡き春の夜を、ゲーテはいひしれぬ感にうたれて、つと椅子をはなれ窓によりぬ。

エルザレム、エルザレム、幽かにその口を漏れしは、亡き友の名なりき。ああ、歎奇なる運命の、翻弄するは我のみかは。はからざりき、君もまた現し世に、圓滿なる愛を求むることかなはずして、ろを他界に尋ねんとは。君は飽くまで、烈しき熱情の人なりしよ。心中深く蟠る戀のほひらは、氷のごとく冷けき人の情にあひて、徒に消えはてたり。死！死！とるべきはたゞこれのみ。君はつゝに死によりて、慰藉を求めんとせり。泣いて人を怨み、怨みて世を呪ひ、狂ひ狂ふて、我と我を殺しけん君の臨終は、いふに忍びず傷ましかりき。あゝ、最後に浮べたる冷かなる笑は、ろも何をか語りし。世人はたゞ冷酷なる批評を、君が上に與へたりき。されど血なき、涙なき、あさはかなる人の子の、なごそを解し得べしや。

君が一生は、げに涙のそれなりき。君は遂に、悲しき人類の一大叙情詩中の、一節をものしき。いたみは同じき我——この間の君が懊惱と、煩悶とを知れる、世にたゞ一人の我は、君が爲に万斛の涙を濺がなん。

我も霜夜の鐘にたどろき、冴ぬわたる寒月に、一口の七首を閃めかして、幾度かわが喉に擬せし。我れはこの悲情を抱きて、樂しき慰安の境に入れる、君があどを追はんとして、たゞいつを限りのわが命ぞと、消ぬやらぬ身のうらめしかりき。されど思ひかへせば、なほこの世には、なすべき事の

多かり。運命われにつらければつらき程、わが血もね、わが心昂る。我は殘忍なる運命に逆らひて、冷けきわが世を辿らん。さるにても君が心は、あまりに清かりき。我は亡き友の幸を神に祈りて、淋しき生活をつゞけん。

あ、愚なるかな人生、一夢にしてつくるにあらすや。いづれ終りは同じき、狭き墓場に急ぐなるを、戀にわらひ、戀にかなしみ、人皆たなじ様をくりかへすころうたてけれ。されど、しかいふわれもまた、あらぬ人を戀したりき。紅き頬、きよき笑、二なくたもひたりしも今はた何かはせん。うれしき昨日をくりかへして、ねむられざりし夜いく夜なりし。うれも詮なし。われは味氣なき浮世に恨の綱をたち、限りなき自然より、無上のさちをうけ、美しき理想の夢に酔はなん。

室の半を、隈どりたる月は沈みて、眺めやる彼方には、紗を張りたらんごとき春の夜の空。萬象あまねくすみわたり、星は一点二點、瞬くごとくうなづく。

しばし、觀念の眼をどちて、默然たりしゲーテは、立かへりて火をどもしぬ。やる瀨なき身を、強いて机の前にとどめ、彼は好めるホーマーの詩集をとり出しつ。

期々として誦しいづるうたに、何となうるの中をさまよふこちして、心もや、收まり、しばしば我を忘れしか。

淡として心は水に似たれど、限りなき苦悶はささる。ゲーテは頭を舉げて、窓越に神秘の空の極みなきを仰げるが、いひしれぬ寂寥と、悲哀とを覺えて、熱き涙ははら／＼と、頬を傳はりて落ちつ。

再び仰ぎ見るかなたに、光芒徒になく曳ける星一つ空をな、めに。天も地も、いと静かに、憂き春の夜は、やう／＼闌けゆく。

ゲーテは、たゞうな垂れぬ。

(をばり)

新體詩

夢の跡

瀧川生

去年の秋くれつめた姉を失ひし其頃とめる歌ごものうちより

亞字欄

秋の恨みは蟋蟀の  
聲のはそきに比ぶべき  
夕ぐれ遠き空の上  
一點黒鴉雲に入る

消れて無に歸す天の涯  
翼をねがふ旅の身の  
窓にもたれて思ひやるは  
病める故園の姉の上  
西日さし込む八疊の  
病床あかく照らすとも

やせさらばひし君が頬の  
青きに誰かほ堪ふべき

したひ焦るる人々の  
涙に床をしたしてぞ  
不治のいたつき洗ひ得ば  
腫かるるも厭はじよ

終に望はなきものと  
くずしの言葉のまゝを  
まこと告げこし兄上の  
情を今は恨まるる